道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

カワサキのNinja650で年間2万キロは走る伊藤さん（私の左）。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

このたびお誘いを受け、60歳からのツーリングクラブ「OSTC」に入会しました。ホンダのOBがメインで、150名ほどが年に複数回のミーティングを行っており、中には20年前のパリダカ当時にお世話になった方も。会員の方が幾度かカフェに寄って下さったのですが、みなさんお元気でビックリ。次回は秋の白樺湖なので、今から楽しみです。60歳過ぎててよかった～♪

さて、巷では高齢者のミスによる交通事故が相次いでおり、カフェでもそのことが話題にあがらない日はありません。この小さな集落でも事故があり、免許返納者のこともよく耳にします。私の目標は、農機具をカブに積んで毎日畑に向かう近所のお爺ちゃん。車はマニュアルの軽トラで、その運転が無理になったらバイク。それも排気量を下げ、最後はカブ。カブと愛犬の散歩と笑顔を欠かさない彼の姿は、いつしかお客さんの間でも評判になっていました。

将来そんな潔い生き方ができそうな方々が、毎日のようにやってくる愉快なカフェ。最近は「さりげなく日本一周」と「最後の大型バイク」を楽しんでいる方が目立ちます。郵便局を定年退職した足で北海道の実家から日本一周している65歳の大内さんは、昔からのペンパルクラブ仲間の家を訪ねて走り、予定は未定で時には野宿も楽しむスタイル。途中で病気を患ったそうですが、それはそれ。今しかできない長旅を満喫していました。一緒にいらした150ccのスクーターの男性は、72歳のバイク業界人で、昨年大型と小型で日本一周終了したとか。

カブで177日目に寄ってくれた兵庫県の「こっち」こと坂本くんは、2度目の北海道に向かって北上していました。パッキングがとても上手く、各所で登山もこなし、人生を謳歌。ロングでは彼のように20～30歳代が一番多いのですが、40～50歳代でも仕事の合間や定年前の有休消化でバンバン走っている人がいます。北海道の千キロツーリングから陸地で戻ってきた兵庫県の長谷さんは、一回のツーリングで3千キロは当たり前。すぐに九州の千キロにも行くそうです。写真はありませんが、旦那を残してぷらっと旅に出たら6千キロ走ってしまった女子もいました。昔に比べるとバイクも道もよくなったとはいえ、その距離感には脱帽です。

信濃大町の造園業、72歳の内山さんも憧れの一人。先日は甥っ子さんと2台で北海道ツーリングを楽しんでいましたが、若い人に混じって大型のオンもオフも乗りこなし（速くて上手い！）、常に20台くらいが車庫に鎮座。我が家のオフ車もそこからやってきたのですが、ほんとうにしなやかで優しくてカッコイイ。小さいバイクには全然なりそうに、、、ないみたい。

豪雨の中、75歳の誕生日に大阪の堺市からニンジャでやってきた伊藤さんも凄かった。カワサキのバイク屋さんで、かつては業販していただいた仲。35年ぶりの再会でしたが、「今でもしょっちゅう何百キロツーリングしてるよ。雨？関係ない。レイン着ればええんや」と豪快に笑い飛ばしてバビューン。誰もがパワーいただきました。

トリは、御年85歳、春日井の「静じい」こと伊藤静男さん。初めて会ったのは23年前の東北のトライアルレース。当時「四十雀（四十から）」というチームで活躍する有名ライダーでしたが、今はその時以上にポジティブに生きている！　毎年2回は若い人をお供にカフェにツーリング。大型スクーターになり、「もう大きいの乗らない」と言っていたのに、先日はこの1200で現れ、華麗なライディングを披露してくれました。走ってなんぼのライダー魂があるから元気な面々。私もたくさん走ってカッコイイ85歳になりたいな～。

北見が近い置戸町（おけとちょう）の大内さん。カブで仲間巡りの日本一周中。

ツイッターで発信し続ける「こっち」さん。青森の夏祭りを満喫したら北へ。最後は四国。

兵庫県の長谷さんとBMW1200。どちらもタフ故、1日500キロくらいは全く疲れないとか。

ヤマハの900で颯爽と現れる大町の内山さん。72歳とは思えない身のこなし。

BMW1200で若い仲間とやってくる85歳の静じい。エネルギーはエンドレスの好奇心。

九州の散歩道

「天文館」で楽しむ夏の風物

フリージャーナリスト　湯浅玲子

暑い夏に食べたくなるかき氷。九州で代表的な氷菓といえば鹿児島の「白くま」です。かき氷の上に白い練乳をかけ、果物や豆などをたっぷりトッピング。鹿児島市内では多くの喫茶店や飲食店のメニューになっています。持ち帰って食べられるカップ入りの商品もあり、テレビや雑誌などで取り上げられたことで、いまや全国的に有名になりました。たまにコンビニで白くまを買うと、鹿児島以外の場所でつくられた商品で驚くことがあります。

白くまの由来は諸説あります。1930年代前半、鹿児島の西田本通りにあった店が夏の副業としてかき氷を販売し、その新商品として練乳をかけた商品を売り出したとき、練乳の缶のラベルにあった白熊の絵を借用したというもの。さらに鹿児島天文館の喫茶店「むじゃき」も白くまの有名店。1947年、店の創業者が練乳をかけたかき氷を考案し、彩りをそえるためにチェリーやレーズンなどを飾り付けたところ、それが白熊の顔のように見えたことから名前がついたといわれます。いずれにしても昭和の前半ぐらいから鹿児島では長く親しまれてきた味です。

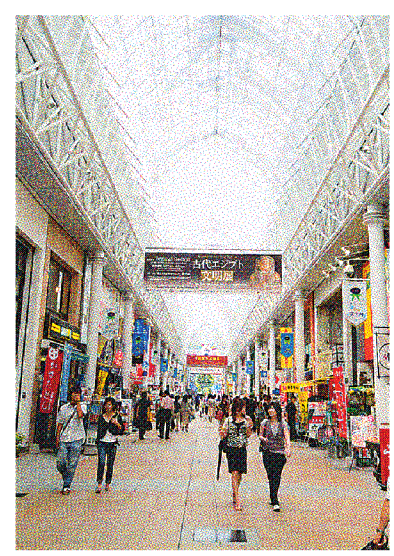
ところで、この「むじゃき」がある天文館は鹿児島一の繁華街。長いアーケードがあり、周囲の路地裏などにも店が立ち並びます。昼夜を問わず人通りが絶えない地域です。天文館という商業地にしては変わった名前は、第25代薩摩藩主・島津重豪（しげひで）に関係しています。1779年、重豪がここに天文観測や暦の研究施設として「明時館（別名：天文館）」を設置します。大正から昭和にかけて路面電車が開通したことから、次第に繁華街として発展していきました。

島津重豪は西洋の文物に強い関心があり、蘭学などを学んで積極的に藩内の開化政策を進めました。天文館もそのひとつで、星の動きを観察して薩摩暦と呼ばれる独自の暦を編さんしていました。当時は幕府以外に暦をつくることは許されなかったのですが、薩摩は辺境の地にあることから、独自の暦づくりが許された唯一の藩だとされています。

地域の風土に合わせて編さんされた薩摩暦は、適切な時期に適切な作物をつくり、農産物の増産を目指すものでした。その成果か鹿児島には豊富な素材が各地にあり、それを生かした美味しいものがたくさんあります。黒豚、鹿児島ラーメン、郷土料理と一緒に味わう焼酎。天文館には白くまだけでなく、こうした鹿児島の味を楽しめる店もたくさんあります。

（写真提供：鹿児島市）

鹿児島では1年中食べることができる白くま



天文観測施設が名前の由来となった天文館

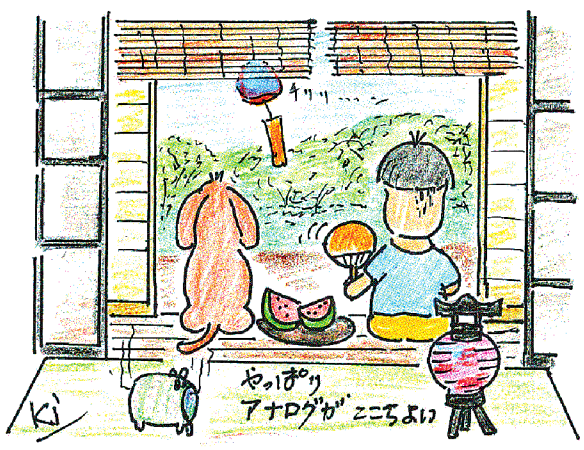
ハッと思いました

蝉の声が暑さを増幅する日々が続きます。来年の今頃はオリンピックで盛り上がり、パラリンピックに向けてドタバタしている頃でしょう。兎も角、お天気が気になります。屋外競技が少しでも良好なコンディションで行われてほしいものです。

さて、私的感想として、昨今のオリンピックは、その本来の意義を失っているのではないかと・・。「より速く、より高く、より強く」や「貧富や身分、性別、人種などによるいかなる差別もなく・・」との精神から遠くかけ離れてしまい、ビジネスイベント化されているのでは。各競技は、それぞれワールドカップが行われていますし、時代と共に多様化する競技、新たな競技についても、オリンピックとしてやる必要性があるのだろうか？と疑問がいっぱいです。

新たなと言えば、高速道路でのハンズオフ、つまり手放し走行（運転）が、但し書きはあるものの、テレビコマーシャルで拡散されていますが、これってどうなんでしょう？

路上の車線が不鮮明になっていたり、車載られた感知機能が、小石や虫、泥水などで低下するかも。何らかの不具合で事故に至った時、その車両だけであれば当事者とメーカーの問題だけど、第三者を巻き込んだ場合どうなるのでしょう。

道路は人（子供、成人、老人）、自転車、バイク、乗用車、バス、トラックなどが混在しています。高速道路でも、バイク、普通車、大型車が年式を大きくまたいで走っています。

性能差が大きなもの、運転（操作）の能力差、意識差が大きな人々が混在する状況はとても恐ろしいと思いませんか？